

## 審査の結果の要旨

氏名 楠原 生雄

本論文で扱うアシエンダとは、メキシコの植民地時代から独立期にかけて、同国の主だった産業経済活動を担った生産・生活組織である。アシエンダ建築とは、その物理的核であった建築複合体である。

アシエンダは通常「産業」の種類によって分類されることが多いが、本論ではアシエンダ建築を「産業」「気候」の二つの指標によって類型化して体系的にとらえる。

第1章の「アシエンダの歴史」では、先行研究者が一致する、「土地・水・労働力」の支配という概念を検討する。アシエンダが大私有地の合法的な所有権を獲得し、また労働者に食住などの雇用条件を提供するようになったのは、17世紀のことであり、植民地時代後半が最初の繁栄期となった。独立政府による教会所有地および先住民集落共同所有地の解体は新たな大私有地を誕生させ、近代化政策、鉄道網の発達による経済発展は、19世紀末から20世紀初頭にかけて、アシエンダにとって最大・最後の繁栄期を築いた。そして、1910年に始まるメキシコ革命に基づく1930年代の農地改革によって解体され、歴史の表舞台から姿を消した。

第2章では「メキシコの気候」を扱った。

第3章の「アシエンダ・データベースとアシエンダ分布」では、基礎情報として1,550件のアシエンダ・データベースを作成した。その全国分布は、基本的に「平地・水・人口」の三つの条件を兼ね備えた地域に分布していたことが観察できた。データベース構築作業は極めて高く評価できる。

第4章である「気候とアシエンダの産業」では、建築の分析に先立って、アシエンダの産業と気候データについてのデータベースを作成した。熱帯ではカカオなど、亜熱帯ではサトウキビ、温帯・準乾燥帯では穀物、残る乾燥帯では家畜という優先順位があり、気候と産業の基本的な対応関係が決定されていた。19世紀後半には、メスカル、プルケ、エネケン、コーヒー、綿花などの新しい産業が生まれたことが示される。

第5章の「アシエンダの生産施設と建築プログラム」では、「産業」を建築類型化の基準として捉え、産業別に生産施設の「建築プログラム」を明らかにした。各産業の「加工プロセス空間」という因果関係を示すことで、各産業が固有の施設を有していることを示した。

第6章の「アシエンダの住居施設と建築プログラム」では産業施設のプログラムが産業ごとに異なるのに対し、住居施設の場合は共通であり、両者を合わせると一つのアシエンダ建築の総合的な「建築プログラム」となることを示した。

第7章の「気候とアシエンダ建築」ではアシエンダ建築の中で最も気候に敏感である主館に着目し、その平面形式と屋根形式という二つの建築変数について、30州に散在する753件のサンプルを用いて気候データとの相関関係を分析した。

第8章である「建築計画と周辺環境：トラスカラ州のアシエンダ・テネシャックの事例」では、北部に位置し、やや不安定であるが主力の穀物と、低利益であるが安定したプルケ・家畜を産業とする複合型アシエンダを扱う。この建築群の立地は10466haの領地の中で、「平地」へのアクセスと「水」を確保するピンポイントの場所にある。主館・穀物倉庫・家畜舎・ティナカルというアシエンダの富を内包する諸施設から成る主建築複合体は、L字型の平面計画をもち、全ての出入口を二辺に挟まれたファサードに集中させることで、監視・防御性を高めている。主な諸室はパティオの北側に位置しているが、増改築歴の分析から、全盛期に南西側の家畜舎を増築する以前は、諸室が南側にあり外に対して開けていたことも分かった。

まとめでは、本論文全体を通じて明らかにされたアシエンダ建築の何たるかを、総合的に示した。建築と気候との関係という一貫した視点を通じて、アシエンダという歴史的建築がどのように環境に適応していたのかを示し、建築に特有の研究手法としてアシエンダ建築という、我が国では未踏の分野における研究を発展させたことの意義は大きい。よって本論文は博士(工学)の学位請求論文として合格と認められる。